ドクター内田のジャズ友は達

△⑤▽

疾風のように消えた『フォーサウンズ』

語り草の衝撃的演奏

長いお付き合いのジャズ仲間たちが、例外なしに、「現在最も刺激的なグループ」と評価している「峰―板橋―井野―村上」バンドを「フォーサウンズ」と名づけた理由にかかわりのある、もうひとつのカルテットとは、先回お話しした渡辺貞夫の最強グループより、さらにひと昔以上も前の一九五三年に生まれた、「守安祥太郎(ピアノ)宮沢昭(テナー)上田剛(ベース)原田寛治(ドラム)」による〝幻のカルテット〟である。

このグループはリーダー格だった上田剛によって「フォーサウンズ」と命名されたが、その活動はわずか一年たらず、まるでジャズ界を疾風のように駆け抜けて消え去った。残されたLPもない、このカルテットの衝撃的な演奏は、耳にした古いファンにとっては永遠の語り草なのだ。

今考えると、あれは幸運の女神に導かれたのに違いない。そのころの僕は、名大医学部の学生で二十四歳だった。名古屋では、まだ入手のむずかしかった輸入LPを求めて夜行列車で上京するたびに、必ず有楽町のガードわきにあったジャズ喫茶「コンボ」に立ち寄った。そこで紹介されたのが、二十九歳のピアニスト守安祥太郎だった。

天才守安と出会う

上映中の映画「バード」は、モダンジャズをつくり、ジャズ史上最高のアドリブ奏者とうたわれるチャーリー・パーカーの伝記だが、ジャズになじみのうすい映画ファンには、クリント・イーストウッドの監督ということで話題になるだろう。

当時、「コンボ」に集まったのは、この「バード」ことパーカーを信奉する秋吉敏子、宮沢昭、渡辺貞夫、高柳昌行ら(数年後、僕とは離れられない縁で結ばれる人たちだが)で、守安は、その中心的指導者だった。そして何よりも、そうしたジャズメンや僕らのファンにとってのパーカーは、現に生きている同時代の人であり、偶像だったのだ。

いかにも慶応出身らしく、とても紳士的だった守安さんは、その夜、初対面の僕をいくつかのジャズクラブに案内してくれたあと、「銀座の貿易会館という所で仕事してるから遊びに来ませんか」と誘ってくれた。驚いたことに、そこは「本当にジャズをやらせてくれるのかなあ」と不思議に思ったほどの高級クラブだった。

だが「フォーサウンズ」の演奏は、お客おかまいなしの激しさで、レコードでしか耳にしたことのない本物の「ビバップ」を、まるで熱病にとりつかれたのではないかと思うほどの真剣さで延々と続けたのだ。

昭和28年、東京で宮沢昭とセッションした故守安祥太郎も、秋吉敏子も一緒だった

名門の名を残す

天才守安は、二年後鉄道に身を投げて伝説の人となった。三十一歳の若さだった。

峰厚介たちの燃えたぎるプレーを聴いて、今や忘れ去られようとしている名門「フォーサウンズ」の名を何とかよみがえらせたいと考えた僕は、すぐさま、オリジナルメンバーで「ジャズ界の大御所」と呼ばれる宮沢昭と、オーディオ評論家に転じた上田剛に了解して欲しいと連絡した。

「きっとすごいグループに違いないでしょう。とてもうれしいお話ですから、新しい『フォーサウンズ』の皆さんによろしくお伝え下さい」。本当にほっとしたねえ。

(内田 修)